

20 年国公立大入試／「選抜要項」分析

「後期」募集縮小の一方で、「推薦・AO」が
国立大 15%、公立大 24%の過去最高に！

名古屋大は「後期」を全廃し、「前期・推薦」に振り替え。
東京大「後期」は理 を廃止、募集枠 30%に縮減して全科類一括募集。

旺文社 教育情報センター 19 年 9 月

20 年入試の『入学者選抜要項』が、先ごろ各国公立大から発表された。

国公立大では 18 年から分離分割方式の募集人員分割の弾力化が本格的となっているが、20 年入試でも後期日程を廃止したり、募集枠を縮小したりして前期日程や推薦・AO入試に振り替える大学・学部が難関大を中心に続出している。その結果、「推薦・AO」募集枠は国立大 14.8%、公立大 23.8%と過去最高に達した。

また、医師の不足や偏在を解消するため、国立大 8 校、公立大 1 校の医学部(医学科)で 24 年ぶりの定員増が図られる。

20 年の受験生数予測

大学受験生数は、3 万 3 千人減の 65 万 7 千人に!?

ここ 8 年程の 18 歳人口・高校卒業者数の推移をみると、12 年～14 年の下り階段の“踊り場状態”、15 年～18 年の減少率 3%程度を経て、19 年は 2%減とやや緩やかな減少に留まった。しかし、20 年は前年比 5%近い大幅な減少が見込まれている。

ところで、大学進学を裏打ちする経済情勢を見渡すと、景気の回復が唱えられている一方で、経済的な格差の拡大が指摘されている。大学への進学動向をみると、短大や専門学校への進学志向の低下に対し、大学への志望の高まりなどで、19 年の現役受験生は約 9 千人(前年比 1.5%)増の 59 万 5 千人であった。しかし、浪人の大学受験生数は 18 年より約 1 万人(同 9.1%)の減少で、9 万 5 千人だった。

20 年は 18 歳人口・高校卒業者数の大幅な減少(減少率 5%)の下で、上記のような大学受験動向は来年入試にも大筋で引き継がれるとみられる。その結果、20 年の大学受験生数(実数；浪人含む。高等学校卒業程度認定試験<以下、高認>合格者等を除く)は、19 年より 3 万 3 千人(4.8%)減の 65 万 7 千人程度と予測される。

一般入試 センター試験

セ試出願者数は、前年比 4%減の 53 万人程度か!?

“セ試課す” 推薦・AO入試が拡大。

<セ試の出願予測>

19 年に新設された国公立大学・学部(センター試験を課さない別日程入試を行う)はない

ため、20年入試で新たにセンター試験(以下、セ試)を利用する国公立大はない。

さて、20年のセ試志願者数(浪人、及び高認合格者等含む)は、大学受験生数減が前年比4.8%の大幅減と予測される中、セ試現役志願率のアップ傾向、私立大セ試利用入試の拡大(セ試利用大学は467大学・1,287学部;19年3月末現在)と人気などを勘案すると、19年より約2万3千人(前年比4.2%)少ない53万人程度とみられる。

<試験日程>

20年セ試は、19年10月1日(月)から10月12日(金)まで出願受付が行われ、20年1月19日(土)・20日(日)の両日に本試験が実施される。正解等は、1月19日・20日のそれぞれについて、当日の試験がすべて終了した後(試験当日の夜になる模様)、大学入試センターのホームページ等で発表される予定である。平均点等の中間発表は1月23日(水)、得点調整実施の有無の発表は1月25日(金)の予定。追試験は、1月26日(土)・27日(日)に行われる。

<受験教科・科目>

◆セ試の出題教科・科目

セ試の出題教科・科目は6教科28科目で、外国語の英語では「筆記試験」のほかに「リスニングテスト」が実施される。

英語リスニングテストの利活用

セ試英語の受験者は全員、リスニングテストが必須となっている。大学には筆記試験(200点満点)とリスニングテスト(50点満点)のそれぞれの得点が大学入試センターから提供されるが、外国語の他の科目(200点満点)との換算方法や配点の割合なども含め、リスニングテストを合否判定に利用するか否かは、各大学・学部(学科)によって対応が異なる。

① リスニングテストを利用しない一部の国公立大

国立大でセ試の英語リスニングテストを全学(全ての選抜方法含む)で利用しない大学はみられないが、筑波技術大(聴覚・視覚障害者を対象)-産業技術(保健科学は利用)、東京大-前期日程(以下、前期または(前)と表示)の全科類(後期日程<以下、後期または(後)と表示>は20年から利用)、及び滋賀医科大学の一般選抜(推薦は利用)では利用しない。

公立大では前橋工科大・長野県看護大・奈良県立大・香川県立保健医療大の4大学(会津大は外国語を課さない)が全学で利用しない。

② リスニングテストの配点

英語の配点(素点)は前述したように250点満点となるが、他の外国語4科目は筆記試験のみの200点満点で、素点の段階で両者の間に格差が生じる。そのため、多くの大学・学部では「筆記200点・リスニングテスト50点を200点に換算」(80%に圧縮。筆記:リスニングテスト=4:1に配分)している。例えば、外国語200点であれば筆記160点、リスニングテスト40点となり、150点であれば筆記120点、リスニングテスト30点となる。

例外は、弘前大-教育(筆記150点、リスニングテスト50点)や愛知県立芸術大-音楽(筆記180点、リスニングテスト20点)など、一部に限られる。

③ 筆記試験との比較

信州大-人文(前・後)、教育<理数科学教育>(前)/下関市立大-経済(前・中期日程<以

下、中期または(中)と表示>)では、筆記試験のみ(200点満点)と、筆記試験+リスニングテスト(250点満点を200点満点に換算)の得点を比較し、高得点の方を採用する。

◆セ試「7科目」入試の状況

① セ試5教科7科目以上を課す大学・学部

国立大学協会(以下、国大協)は、学生の学力低下対策の一環として、国立大志願者に対し、16年から原則としてセ試5教科7科目(国大協は地歴と公民を合わせ1教科<社会>として表示)を課すべきだと提言している。

20年にセ試5教科7科目以上を課す大学・学部数は、国立78大学340学部、公立32大学58学部の合計110大学398学部で、19年より1大学増え、5学部減っている。対象となる募集人員は国立大7万4,547人(入学定員に対する割合77.8%)、公立大5,841人(同23.1%)で、全体としては8万388人(同66.3%)となり、19年より63人減少した(表1・2参照)。

② 国立大の動き

各国立大では国大協の提言を受け、5教科7科目以上を課す大学は、15年の53大学(全国立大の57.0%)から16年には72大学(同86.7%)、17年には77大学(同92.8%)へと急増した。18・19年は77大学(実施割合は18年93.9%、19年92.8%)であったが、20年は東京医科歯科大の前期が7科目となったため、19年より1大学増の78大学(同95.1%)となった。これで、20年入試でセ試7科目を課さない国立大は、筑波技術大・東京外国語大・東京芸術大・鹿屋体育大の計4大学だけで、国立大では大学単位でみる限り、セ試の5教科7科目以上が95%超となり、定着したといえる。募集人員ベースでもわずかに増加(261人、0.4%)している。ただし、学部単位で見ると、中堅校を中心に科目減の傾向も見られる。埼玉大-経済(前)では従来の一般枠(セ試7科目と個別試験3科目)とは別に、セ試入試枠(セ試3科目と調査書)を新設し、軽量科目による複線化を図っている。

③ 公立大の動き

公立大で5教科7科目以上を課す大学は16年19大学(全公立大の26.0%)、17年28大学(同38.9%)、18年32大学(同44.4%)と徐々に増えてきた。しかし、19・20年は18年と同じ32大学に留まり、実施率は大学単位では4割超でほぼ定着の様相だ。また、募集人員ベースでもやや減少し、20年は19年より324人(5.3%)減の5,841人が5教科7科目以上の対象となっている。

◆セ試の受験パターン

20年セ試で課せられる教科数の状況を、国立大と公立大別に図1に示した。

国立大では5教科以上を課す学部が圧倒的に多いが、公立大では3、4、5教科に分散している。国立大を中心とした5教科7科目以上の編成は、次の3タイプに類型化される。

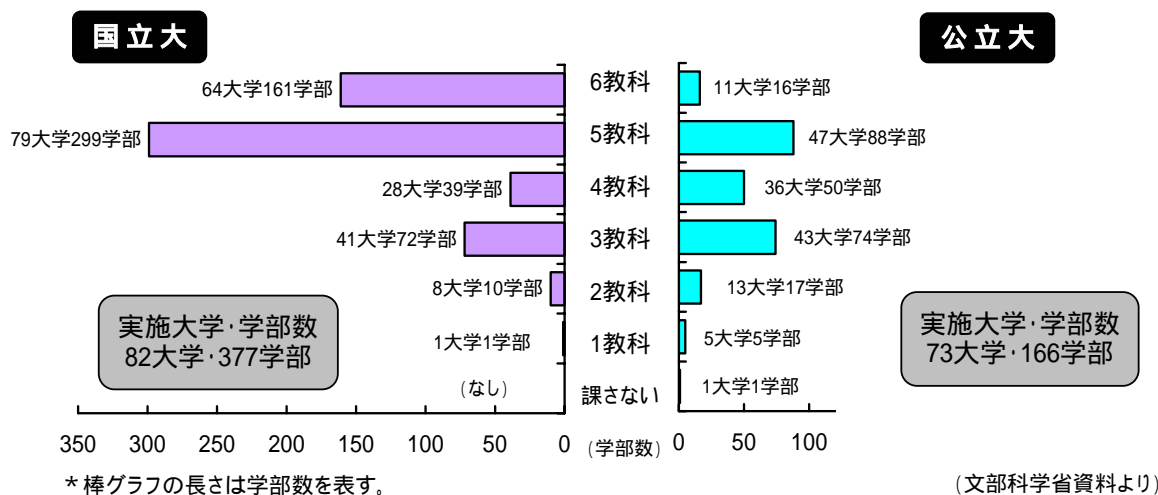
文系型	国語+地歴+公民+数学(2)+理科(1)+外国語
理系型	国語+「地歴・公民」から(1)+数学(2)+理科(2)+外国語
混在型	国語+「地歴・公民・理科」から(3)+数学(2)+外国語、など

注。()内の数字は科目数。

と は、それぞれ文系と理系学部で最も多い、標準型ともいえるタイプである。

の混在型は7科目であるが、この型には国語・外国語のほかに、「地歴・公民・理科から3科目+数学2科目」や、「地歴・公民・理科・数学から5科目」のような教員養成系に多いタイプのほか、「地歴+公民+理科2科目+数学1科目」や「地歴+公民+数学・理科から3科目」のように文系型に近いタイプもみられる。

20年センター試験教科数&実施大学・学部数 (図1)



●センター試験で5教科7科目以上を課す大学・学部数 (表1)

区分	20年		19年		対前年増減		
	大学	学部	大学	学部	大学	学部	
国立大	78 (95.1%)	340 (90.2%)	77 (92.8%)	341 (89.3%)	+1	-1	
公立大	32 (43.8%)	58 (34.9%)	32 (43.2%)	62 (37.1%)	±0	-4	
合計	110 (71.0%)	398 (73.3%)	109 (69.4%)	403 (73.4%)	+1	-5	
全体	国立大	82	377	83	382	-1	-5
	公立大	73	166	74	167	-1	-1
	合計	155	543	157	549	-2	-6

注. () は、全体数に対する割合。(文部科学省資料より)

●センター試験で5教科7科目以上を課す募集人員 (表2)

区分	20年	19年	対前年増減	
国立大	74,547 (77.8%)	74,286 (77.3%)	+261	
公立大	5,841 (23.1%)	6,165 (24.5%)	-324	
合計	80,388 (66.3%)	80,451 (66.4%)	-63	
入学定員	国立大	95,868	96,066	-198
	公立大	25,322	25,138	+184
	合計	121,190	121,204	-14

注. () は、入学定員に対する割合。(文部科学省資料より)

難関大、医学部等での「セ試課す」推薦・AO入試の拡大

難関大や医学部などの推薦・AO入試では、セ試を課す、所謂「セ試課す」推薦・AO入試が多くみられる。

例えば、東北大では後期の廃止で振り替えられた教育・薬・医(保健)のAO入試にセ試を課す。また、新潟大 - 医や徳島大 - 医、福島県立医科大などの地域枠推薦入試でも「セ試課す推薦」を導入する。

医(医)の理科3科目入試

国立大の理系ではほとんどが理科2科目となっている中で、医学系の受験生も物理・化学の2科目受験が多い。そのため、医学系などでセ試の生物を必須とした場合、科目選択の幅が狭まらないよう、理科の試験枠を3コマにして、物理・化学・生物の理科3科目受験を可能としている。

20年入試では、旭川医科大・京都大・大阪大・九州大・佐賀大・京都府立医科大・大阪市立大・奈良県立医科大のいずれも医学科で理科3科目必須となっている。

<セ試個人成績の開示>

大学入試センターでは、セ試の個人成績(受験科目別。国語は出題分野別、英語は「筆記」と「リスニング」別)の本人開示を実施している。

出願時の志願者本人の希望に応じて、20年4月16日(水)以降に書留郵便で通知する。

申込方法は、「志願票(提出用)」に成績通知の希望を記入し、成績開示手数料(800円)を検定料と併せて19年9月3日(月)~10月12日(金)までに払い込む。

一般入試 2次試験

国立大、公立大とも募集人員は、「前期」=増、「後期」=減、「推薦・AO」=増。セ試リスニング利用で、2次リスニング低調。

<入試日程>

20年国公立大2次試験は、20年1月28日(月)~2月6日(水)まで出願受付が行われ、前期(2月25日<月>から)・中期(3月8日<土>以降;一部の公立大のみ)・後期(3月12日<水>以降)の各日程で実施される。

なお、公立の国際教養大は、独自の別日程で実施する。

<「分離分割方式」の弾力化と募集人員>

◆難関大を中心とした「前期集中型」募集

国公立大の2次試験は、公立大の中期を除き、同一募集単位の入学定員を前期と後期とに振り分ける「分割」と、前期の合格者が入学手続きを完了してから後期試験を行うという、前・後期試験の「分離」とを組み合わせた「分離分割方式」によって実施されている。この方式では、前期に合格して入学手続きを完了した者は、後期(公立大中期も含む)に出願、受験しても入学の意志がないとみなされて合格とならない。ただ、教員養成系の専攻・コースなどのように募集人員の少ない場合や実技を主とする芸術系、体育系では「前期のみ」や「後期のみ」の募集も従来から「例外措置」として認められてきた。

しかし毎年、前期募集人員の占める割合が高まっていく中で、特に国立大からは難関大

を中心に前期集中化への要望が強まり、国大協は 18 年入試から、「分離分割方式を維持しつつ、学部単位でみて推薦入試やAO入試を前提に、前期のみや後期のみの募集も可能」とする分離分割方式の弾力化を打ち出した。

公立大学協会（公大協）も、国大協の弾力化の措置に準じている。

このような分離分割方式の弾力化を受け、18 年入試では国立大で、従来の「例外措置」に加え、「前期集中型」募集に移行するところが急増。以降、難関大(学部)を中心に、前期集中化が加速している(表 3 参照)。

20 年入試では、東北大 - 教育・法・薬・医(保健)で後期を廃止し、前期で募集人員増(法 140 160、薬 60 65、医<保健>110 119)としている。このほか、東京大では理科三類(理)の後期募集を廃止するとともに、残りの後期募集を約 3 分の 1(324 100)に削減して全科類一括募集を行う。その結果、前期募集は 8.2%増の 2,953 人(前期:後期 = 30:1。推薦・AO入試は実施せず)となる。また、名古屋大では後期を全廃(19 年に続き、文・理・医・農も後期廃止)し、神戸大 - 医(医)、九州大 - 芸術工などでも後期を廃止する。そして、後期を廃止、削減して、推薦・AO入試に振り替えているケースが目立つ。

20 年入試において、全学で“後期募集ゼロ”の大学は、次のとおり。

- ・国立大：筑波技術大 / 長岡技術科学大 / 名古屋大 / 豊橋技術科学大 / 滋賀医科大 / 鹿屋体育大
- ・公立大：山形県立保健医療大(中期なし) / 会津大(同) / 横浜市立大(同) / 岐阜薬科大(前期、推薦・AO入試なしで、中期のみ)

一方、北海道大 - 獣医(前期 = 28→20、後期 = 12→20)、筑波大 - 医学群(後期を復活)、奈良県立医科大 - 医<医>(前期 = 75→65、後期 = 20→30)などでは、後期募集を増員、復活させている。

●国公立難関大 日程別募集人員 & 前期募集割合の推移 (表 3)

大学名	平成19年		平成20年		前期募集割合	
	前期	後期	前期	後期	19年	20年
北海道大	1,926	457	1,918	465	80.8%	80.5%
東北大	1,804	197	1,838	123	90.2%	93.7%
筑波大	1,279	191	1,264	201	87.0%	86.3%
東京大	2,729	324	2,953	100	89.4%	96.7%
東京工業大	882	126	862	146	87.5%	85.5%
一橋大	760	190	760	190	80.0%	80.0%
名古屋大	1,656	92	1,718	0	94.7%	100.0%
京都大	2,839	20	2,839	20	99.3%	99.3%
大阪大	2,036	481	2,547	665	80.9%	79.3%
大阪市立大	1,151	259	1,151	254	81.6%	81.9%
神戸大	1,816	574	1,804	544	76.0%	76.8%
九州大	1,984	383	1,973	350	83.8%	84.9%

◆一般入試の募集人員

20 年に入試を実施する国公立大は、155 大学 543 学部である。内訳は、国立 82 大学 377 学部、公立 73 大学 166 学部である。

推薦入試などの特別選抜やAO入試、専門高校・総合学科卒業生選抜及び公立の国際教養大別日程入試を除いた、一般入試の総募集人員は 9 万 9,906 人(国立大 8 万 1,027 人、公立大 1 万 8,879 人)で、19 年(『入学者選抜要項』記載の募集人員)より 813 人(0.8%)

の減少となった(表5参照)。

試験日程別の募集人員は、前期7万7,191人(前年比0.2%増)、後期2万776人(同4.3%減)、及び公立大中期1,939人(前年より49人減;公立大のみ)となっている。

分離分割方式の前期と後期の募集人員の割合をみると、前期は平成2年の77.5%から9年(前回の新課程入試初年度)の72.1%まで減少した後、10年からは毎年上昇を続け、20年=前期78.8%(19年78.0%)、後期=21.2%(同22.0%)となっている。特に国立大の前期は、16年=74.3%→17年=74.7%→18年=76.1%→19年=77.7%→20年78.5%と、18年からの「前期集中型」の急増ぶりをうかがわせている(表5・表6参照)。

<2次試験科目は、国立大2教科、公立大1教科が最多>

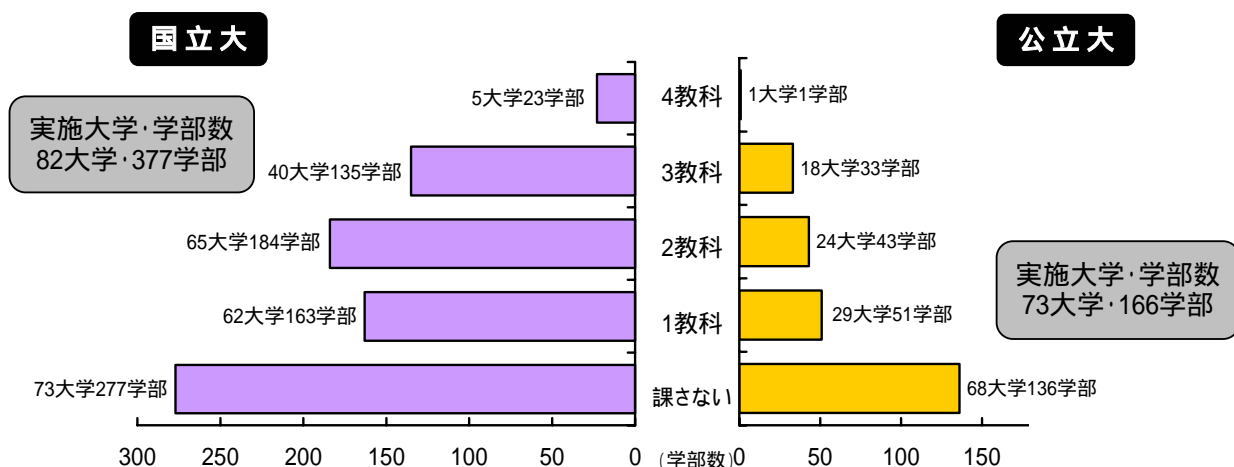
20年の2次試験で課せられる教科数の状況を、国立大と公立大別に図2に示した。国立大、公立大とも学力試験(学科試験)を課さないところが多い。これは、後期で学力試験を課さず、小論文や面接、実技などで選抜しているところが多いためである。

ただ、一般入試の前期試験では1~3教科を課す学部・学科が多く、国立大では2教科、公立大では1教科を課す大学・学部が最も多い。

2次試験科目の大規模な変更は少ないが、次のような大学・学部で負担の増減がみられる。

- ・負担増：福島大 - 理工学群(前)で「数学・理科から1→数学・理科必須」、(後)で「小論文→数学」/信州大 - 農(後)で「総合問題→理科」/名古屋大 - 文(前)で「地歴・数学から1→各必須」、理(前)・医<医>(前)で「国語を追加」、農(前)で「理科1→2科目」/三重大 - 工(後)で「2次課さない 物理(機械工・電気電子工・物理工)、数学(情報工)」/愛媛大 - 工(後)で「面接 数学」/鹿児島大 - 歯(前)で「数学の出題範囲に数学・Cを追加」、など。
- ・負担減：一方、軽減される場所は、岩手大 - 工(前)の「理科2→1科目」/山口大 - 経済(前)の「数学・英語必須→数学・英語から1」、理(後)<物理・情報科学>の「数学・理科→面接」、など。

20年2次試験教科数&実施大学・学部数 (図2)



*棒グラフの長さは学部数を表す。

(文部科学省資料より)

＜2次リスニングは低調＞

セ試英語に18年からリスニングテストが導入されたのに伴い、2次試験でリスニングテストを課す国公立大は、17年52大学129学部 18年34大学68学部 19年25大学45学部 20年23大学41学部と、大幅に減っている。特に実施学部数でみると、国立大は17年113学部 18年56学部 19年35学部 20年32学部と、わずか3年間で71.7%減の激減ぶりとなっている(図3・表6参照)。

＜学外試験場開設の増加＞

16年度の国立大学法人化の後、私立大さながら、学外試験場を設置する大学・学部が増加傾向にあるが、20年も国立大における新設が目立つ。

例えば、北海道教育大(前)が仙台、小樽商科大(前)が東京、山梨大-工(前)が名古屋、富山大-理・工(前)が名古屋、山口大-工が大阪に、大学として初めて試験場を開設する。また、既に学外試験場を設けている国公立大でも、室蘭工業大(前)が名古屋に、弘前大-医<保健>(前)が札幌に、岩手大-人文社会科学・工(前・後)が札幌、及び農(前)が札幌・東京、(後)は札幌に、鹿児島大-水産(後)が東京に、それぞれ試験場を増設する。

一方、東京海洋大では、学外試験場(福岡)の実施を取りやめる。

＜入学定員、大学統合、学部改編等＞

◆20年入学定員

前述の総募集人員(9万9,906人)は一般入試のみであるが、推薦・AO入試や専門高校・総合学科卒業生選抜、社会人選抜なども含めた20年入学定員は国立大9万5,868人、公立大2万5,322人の合計12万1,190人で、国立大は19年より微減、公立大は微増である。

ただ、国立大の入学定員については、20年度文部科学省概算要求(予算)に絡み、19年8月末に文部科学省より『20年度国立大学の入学定員について(予定)』が別途発表されている。従って、各大学・学部(学科等)の入学定員は、今後変更される場合がある。

予定では、国立大の入学定員は、学部・学科の新設・改組、入学定員の改訂、医学部医学科の増員などにより、19年に比べ差し引き322人(0.3%)減員の9万5,956人である。

◆大学統合

- ・国立大：大阪大と大阪外国語大が19年10月に統合し、大阪大-外国語学部(入学定員580人)として20年4月から学生を受け入れる。
- ・公立大：長崎県立大-経済と県立長崎シーボルト大-国際情報・看護栄養が統合し、長崎県立大-経済(佐世保校)、国際情報・看護栄養(シーボルト校)として、20年4月に開学される。

◆学部の改編・改組等

金沢大では、従来の8学部(21学科4課程)から、人間社会学域(6学類)、理工学域(6学類)、医薬保健学域(4学類)の3学域(16学類)に改編する。

京都府立大では、学部改組(福祉社会 公共政策)と、学部統合(人間環境・農 生命環境)を行う。

このほか、和歌山大では経済学部の観光学科を母体に観光学部を、琉球大では法文学部の観光科学科と産業経営学科を母体に観光産業科学部をそれぞれ新設する。

◆医(医)の定員増

医師の不足や偏在を解消するため、奨学金の設定など、一定の条件の下に20年入試から医学部医学科の定員増を暫定的に認めることになった(新医師確保総合対策)。対象は医師不足が特に深刻な10県(青森・岩手・秋田・山形・福島・新潟・山梨・長野・岐阜・三重)及び自治医科大で、期間は最大10年、増員は最大10人とされる。該当する大学は弘前大・秋田大・山形大など国立8校、福島県立医科大の公立1校、及び岩手医科大・自治医科大の私立2校である。

また、これとは別に医師不足への抜本的な解消に向け、上記に上乘せする形で全都道府県を対象とした医学部(医学科)定員増を認める医師養成の推進が図られることになった(緊急医師確保対策)。21年から最大9年間(公立大では20年からの10年間)とされるが、横浜市立大 - 医と和歌山県立医科大では、20年からの定員増に向け検討している(9月現在)。

こうした臨時定員増のない医学科でも、最近では地元の医師確保のために地域枠推薦などを導入する動きが活発化している。(表4参照)

医学科の定員については、医師の需給バランスの見通しなどから、これまで抑制措置が採られてきた。医学科の入学定員は昭和56(1981)年～59(1984)年の8,360人(防衛医科大を含む)をピークに漸減し、最近では7,700人前後で推移。今回の定員増は24年ぶりである。

●医学部(医学科)の定員増&募集人員の変更

(表4)

大学 学部(学科)名	臨時定員増	募集人員の変更	大学 学部(学科)名	臨時定員増	募集人員の変更
旭川医科大 医(医)	なし	後期50人 40人、地域枠推薦(10人)を新規実施	名古屋大 医(医)	なし	前期75人 85人、後期廃止
弘前大 医(医)< * >	80人 90人	地域枠推薦20人 30人	三重大 医(医)< * >	100人 110人	地域枠推薦(10人)を新規実施
秋田大 医(医)< * >	95人 105人	増員の振り分け未定(9月現在)	神戸大 医(医)	なし	前期65人 70人、後期廃止、A015人 25人
山形大 医(医)< * >	100人 110人	前期60人 70人	徳島大 医(医)	なし	前期60人 65人、後期廃止、推薦20人 30人(地域枠5人を新設)。
筑波大 医(医)	なし	前期60人 55人、後期5人を復活	高知大 医(医)	なし	前期30人 50人、後期廃止、地域枠推薦(10人)を新規実施
東京大 理	なし	前期80人 90人、後期廃止	佐賀大 医(医)	なし	後期20人 18人、佐賀県推薦枠(2人)を新設
新潟大 医(医)< * >	95人 105人	前期75人 80人、推薦(一般枠)15人 20人、地域枠推薦(5人)を導入	長崎大 医(医)	なし	後期25人 20人、A010人 15人(地域医療枠を新設)
山梨大 医(医)< * >	100人 110人	後期70人 60人、推薦20人 30人	札幌医科大 医	なし	前期60人 75人、後期廃止、地域枠推薦(5人)を新規実施
信州大 医(医)< * >	95人 105人	前期40人 50人	福島県立医科大 医< * >	80人 90人	後期25人 23人、地域枠推薦8人 15人、県外枠推薦5人を新規実施
福井大 医(医)	なし	地域枠推薦(5人)を新規実施	京都府立医科大 医(医)	なし	前期80人 100人、後期廃止
岐阜大 医(医)< * >	80人 90人	地域枠推薦(10人)を新規実施	奈良県立医科大 医(医)	なし	前期75人 65人、後期20人 30人(地域枠10人を新設)
浜松医科大 医(医)	なし	前期60人 55人、推薦25人 30人			

注) < * >印は、「新医師確保総合対策」による増員。

< 2段階選抜 >

2段階選抜の実施予告大学・学部数は、国公立大全体では19年より1大学1学部増の55大学(入試実施大学に対する割合35.5%)・171学部(入試実施学部に対する割合31.5%)である。内訳は、国立大が35大学(同42.7%)・119学部(同31.6%)、公立大が20大学(同27.4%)・52学部(同31.3%)となっている。

20年で廃止、新規実施となる主な大学・学部は次のとおり。

・廃止：弘前大 - 医<医>(前) / 山形大 - 理<数理科学>(前) / 千葉大 - 工A<デザイン>

- ン工>(後)/東京医科歯科大-医<保健衛生>・歯<口腔保健>(前)/信州大-医<医>(前)/宮崎大-医<看護>(前・後)/札幌市立大-看護(前)/岐阜薬科大-薬(中期)/名古屋市立大-看護(前・後)、など。
- ・新規実施:旭川医科大-医<医・看護>(前・後)/筑波大-医学群(後)/富山大-医<医>(前・後)/大阪大-外国語(前・後)/神戸大-海事科学(前・後)、など。

<2次試験の出願予測>

国公立大2次試験への出願動向は、セ試の平均点アップ・ダウンに強く影響される。平均点アップだと“強気出願”となり、国公立大や難関大(学部)への出願増がみられ、逆に平均点ダウンだと、“弱気出願”で科目数の少ない地元公立大や私立大への流出傾向がみられる。19年は、文系・理系ともセ試平均点の大幅ダウンによる弱気出願などで、国公立大志願者数(延べ数)は18年より1万6,824人(3.3%)減の48万8,546人であった。

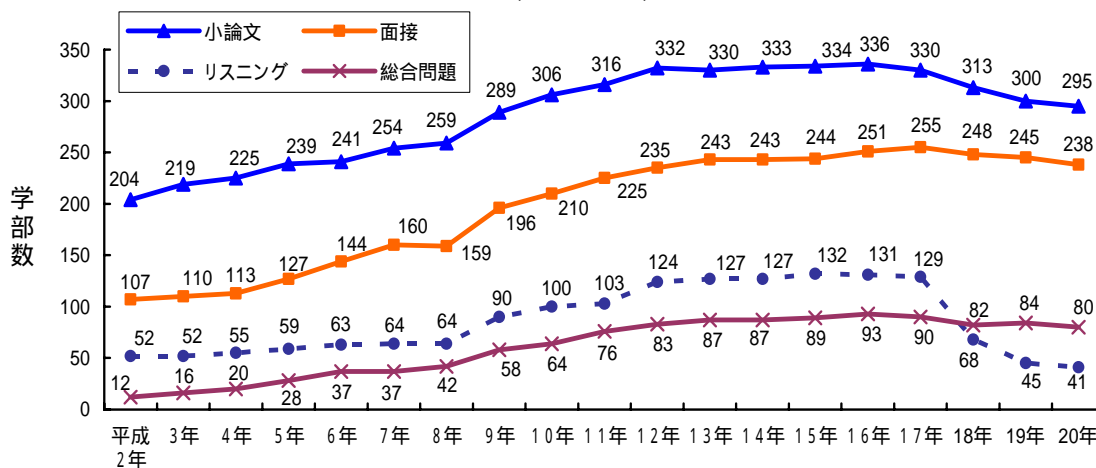
20年は大学受験生数の4.8%程度の減少が予測されるが、セ試平均点のアップが予測されることなどから、20年の国公立大志願者数は、19年より1万5千人(3%)程度減って47万人前後とみられる。

●20年国公立大一般入試/地区別・日程別募集人員 (表5)

	前期(人)	後期(人)	中期(人)	合計(人)
北海道・東北	11,042	2,750	125	13,917
関東・甲信越	20,697	5,839	530	27,066
北陸・東海	10,108	2,897	419	13,424
関西	13,647	3,413	612	17,672
中国・四国	10,259	2,606	253	13,118
九州	11,438	3,271	—	14,709
全国合計	77,191	20,776	1,939	99,906
割合	78.8%	21.2%	—	—
	77.3%	20.8%	1.9%	—

- 注1. 20年「入学者選抜要項」(19年7月末現在)ベースによる。地区の区割りは、旺文社による区分。
 注2. 人数は推薦入試等の特別選抜、AO入試、専門高校・総合学科卒業生選抜及び公立の国際教養大別日程入試を除く。
 注3. 割合の上段は前・後期日程内での割合、下段は総募集人員(前・後・中期日程)内での割合。

国公立大で小論文、面接、リスニング、総合問題を課す学部数の推移(一般入試) (図3)



国公立大 入学者選抜概要の推移(学部数/前・後期日程は募集人員割合) (表6)

内容		平成3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	
入学者選抜実施学部		451	453	460	474	488	500	506	517	530	542	547	550	551	550	549	546	549	543	
方式・日程	分離分割方式	196	241	310	348	378	392	466	475	520	532	537	540	540	540	536	533	537	532	
	前期日程(%)	76.5	74.8	73.4	73.4	73.1	72.9	72.1	72.3	72.7	73.5	73.9	74.4	74.5	74.8	75.4	76.6	78.0	78.8	
	後期日程(%)	23.5	25.2	26.6	26.6	26.9	27.1	27.9	27.7	27.3	26.5	26.1	25.6	25.5	25.2	24.6	23.4	22.0	21.2	
	連続方式A日程	141	130	115	110	102	97	13	12											
	連続方式B日程	119	93	55	41	31	29	12	11											
	中期(C日程)	12	12	12	13	12	12	12	13	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
センター試験	6教科を課す							7	7	4	5	6	6	6	144	163	176	180	177	
	5教科を課す	370	366	360	367	373	376	395	399	403	405	407	408	410	386	383	388	387	387	
	4教科を課す	69	80	96	107	115	119	139	146	150	163	169	170	165	109	97	88	92	89	
	3教科を課す	91	110	142	162	172	178	193	195	206	221	222	218	215	170	162	151	153	146	
	2教科を課す	12	12	18	30	35	36	38	41	47	50	50	47	45	39	30	26	24	27	
	1教科を課す	1	1	2	3	3	4	5	5	7	6	8	8	7	6	7	7	7	7	6
	課さない									1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
2次試験	4教科を課す									20	20	22	22	22	21	21	21	21	24	
	3教科を課す									148	154	156	164	169	166	163	171	168	168	
	2教科を課す									249	250	251	251	254	257	254	249	239	227	
	1教科を課す									223	223	218	216	217	213	213	214	208	214	
	課さない									436	445	448	453	453	448	443	416	424	413	
選抜方法等	一般入試	小論文	219	225	239	241	254	259	289	306	316	332	330	333	334	336	330	313	300	295
		総合問題	16	20	28	37	37	42	58	64	76	83	87	87	89	93	90	82	84	80
		面接	110	113	127	144	160	159	196	210	225	235	243	243	244	251	255	248	245	238
		実技検査	71	73	73	74	75	76	78	78	78	78	78	80	80	79	77	79	80	77
		リスニング	52	55	59	63	64	64	90	100	103	124	127	127	132	131	129	68	45	41
		学力試験を課さず小論文、面接等で選抜	220	246	295	319	339	349	406	415	436	445	448	453	453	448	443	416	424	413
	特別選抜	推薦入試	245	253	264	284	302	310	330	344	369	389	398	398	402	406	409	401	406	402
		内「セ試」課す	106	105	106	107	111	113	118	118	122	125	123	123	122	119	118	121	126	135
		内「セ試」免除	154	164	178	201	222	228	246	263	291	321	337	341	343	350	356	349	354	342
		帰国子女	174	186	208	220	233	234	241	253	267	279	287	287	292	293	292	285	286	278
		中国引揚者等子女	33	41	47	53	55	59	62	66	76	82	82	85	85	81	79	70	67	58
		社会人	42	45	57	69	84	87	107	119	133	149	169	170	179	179	181	182	186	183
	AO入試										12	32	58	73	86	101	121	136	154	
	専門高校・総合学科卒業生選抜						1	6	12	20	21	21	21	21	20	20	20	18	15	
	その他	2段階選抜実施予告	254	240	228	222	222	220	210	204	205	200	189	185	185	183	177	175	170	171

注1. 文部科学省の資料より。

注2. 「」は実施していないか、公表されていないことを示す。

注3. 連続方式(A・B日程)は国立大8年、公立大10年まで実施。公立大C日程は10年まで(以降は中期日程)。

注4. 公立の国際教養大は16年より、独自の別日程入試を実施。

☆ 「推薦・AO入試」「その他の選抜」を次頁以降に掲載。 ☆

推薦・AO入試

一般入試の「後期」廃止・縮小に伴い、「推薦・AO」入試が拡大。
医学科での「地域枠推薦」が活発化。

<推薦・AO入試の拡大>

◆「分離分割方式」の緩和と「推薦・AO入試」の拡大

国立大の難関大では後期を廃止、または縮減して、募集人員を前期や推薦・AO入試に振り替えるケースが目立つ。また、医学部(医学科)では、地域枠などでの推薦入試が増えてきている。

国大協は、入学定員に占める推薦入学の割合を、20年からこれまでの「推薦3割目安」を「推薦+AO入試5割の範囲」に改めた。分離分割方式の弾力化に加え、今回の推薦・AO入試募集の弾力化が、推薦・AO入試の拡大を一層押し進めている。

公立大の推薦入学は従来から定員の5割を超えないことが目安となっており、AO入試の募集は別枠とされている。

なお、“セ試課す”AO入試の実態に即し、20年からセ試の「成績請求票」にこれまでの「推薦入学」用に加え、「AO入試」用が新設された。

◆推薦・AO入試：国立大 14.8%、公立大 23.8%

推薦・AO入試の募集人員の状況を見てみよう。

推薦入試は、国立大 1万 1,665 人(全募集人員に占める割合 12.2%)、公立大 5,632 人(同 22.2%)。AO入試は、国立大 2,468 人(同 2.6%)、公立大 402 人(同 1.6%)。「推薦・AO入試」合計では、国立大 14.8%、公立大 23.8%で、ともに過去最高となっている。

前述したように、医学部(医学科)のほか、教員養成系での「地元枠」推薦も多くみられる。「前期集中化」による一般選抜における受験機会の“実質1回化”が進む一方で、推薦・AO入試の拡大により、入試の多様化と評価尺度の多元化も進んでいるといえる。

なお、20年入試において、全学で推薦・AO入試を実施しない大学は、次のとおり。

- ・国立大：東京大 / 東京芸術大 / 京都大
- ・公立大：岐阜薬科大 / 京都市立芸術大 / 福岡女子大

<推薦入試の新規実施大学・学部>

20年入試で推薦入試を新たに導入する主な大学・学部は、次のとおりである。

旭川医科大 - 医(医) / 弘前大 - 医(保健<検査技術科学・理学療法>) / 埼玉大 - 工(機能材料工) / 新潟大 - 歯(口腔生命福祉) / 愛知教育大 - 教育(初等教育教員<幼児教育、国語、社会、数学、家庭>)、中等教育教員<国語、書道、数学、家庭、英語>、養護教諭、現代学芸<国際文化> / 名古屋大 - 文 / 鳥取大 - 工(電気電子工) / 鳴門教育大 - 学校教育(学校教育教員<幼児教育、小学校教育・中学校教育-社会、障害児教育>) / 愛媛大 - 教育(芸術文化<音楽文化>)、工(応用化学科) / 高知大 - 医(医) / 鹿児島大 - 教育(生涯教育総合<健康教育>)、など。

<AO入試の新規実施大学・学部>

20年入試で新たにAO入試を実施する大学・学部は、次のとおりである。

- ・国立大：岩手大 - 人文社会科学 / 東北大 - 教育・薬 / 山形大 - 工(A) / お茶の水女子大 -

文教育・理・生活科学 / 富山大 - 理 / 金沢大 - 理工学域 / 愛媛大 - 農 / 高知大
- 人文 / 琉球大 - 法文(昼)・工(昼)

・公立大 : 京都府立大 - 公共政策・生命環境 / 山口県立大 - 国際文化・社会福祉・看護栄
養長崎県立大 - 国際情報・経済 / 熊本県立大 - 環境共生

注. 東北大・富山大・愛媛大・高知大・京都府立大・熊本県立大は、他学部で既に実施。

その他の選抜

専門・総合選抜/帰国子女・社会人特別選抜

専門・総合選抜は 10 大学 15 学部で実施。

社会人特別選抜は 95 大学 183 学部で実施。

<専門・総合選抜>

専門高校や総合学科を対象とする専門高校・総合学科卒業生選抜は、国立 9 大学 12 学部、
公立 1 大学 3 学部の計 10 大学 15 学部で実施(表 6 参照)。実施大学は 19 年より 2 大学減。

<帰国子女・社会人特別選抜>

帰国子女特別選抜は 99 大学 278 学部(19 年 101 大学 286 学部)、社会人特別選抜は 95
大学 183 学部(同 98 大学 186 学部)である (表 6 参照)。